

## 研究集会「日本の数学者は今何を行うべきか？」の開催について

数学は「科学を語る言葉」であり、科学の研究には不可欠です。また歴史を振り返れば直ぐ分かるように、数学の研究成果が自然科学発展に結びついた例が数多く見受けられ、情報化が進むこれからは数学の重要性がさらに増すものと思われます。しかし日本社会においては、数学研究の重要性が十分に認識されているとは言い難い状況にあり、その結果、横浜市立大学から数学の専教育が無くなるなどの事態すら生じています。

さて、国立大学が法人化され再編が行いやすくなりました。また、中央教育審議会は「2007年度には大学に入学を希望する人の数と大学の定員がほぼ同じになる」との見込みを示し、学生定員の削減が避けられないことが分かりました。そこで、近く襲うであろう大学再編の大波から生き残るため、日本数学会と日本学術会議数学研究連絡委員会が協力して12月23日(木) - 25日(金)に研究集会を開き、私達は何を準備しておくべきかについて検討を行いました。

先ず、23日の午後駒場エミナースで、数学者の姿が外部から最も見やすい大学の教養教育について、岡本和夫氏の司会で「これからの数学の教養教育はどうすべきか」との題でパネルディスカッションを行いました。さらに、24日には東京大学数理科学科で研究集会を継続し、森田が「数学を取り巻く環境について」との講演を、上野健爾氏が「大学に於ける数学の研究・教育環境の激変にどう対処するか？」との講演を行いました。また、これに続き高橋陽一郎氏が、京都大学数理解析研究所が計画中の「コンソーシアム計画」について説明を行い、この計画を協力することを全員一致で決めました。

なお、森田の講演の要約がございますので、ご連絡戴ければコピーをお送り致します。

理事長 森田 康夫 記